

# 薬物依存者の共同生活施設

## 山梨ダルク 成果と「裏切り」重ね1年

薬物依存症の人たちが、共同生活をしながら立ち直りをを目指す施設「山梨ダルク」が、開設1周年を迎えた。14日、記念のフォーラムを開く。手応えも課題もあったこの1年。施設長の佐々木広さん(41)は「出会いの連続だった」と振り返る。(柏原愛)

### 現在の利用者23人

14日に記念フォーラム 施設長の佐々木さん

### 「自分の弱さ知る人立ち直る機会多い」

甲府市内の2階建てビルに、山梨ダルクの看板がかかる。薬物依存症に苦しむ人々が、ここで助け合いながら生活している。当初は10人程度と見込んでいた利用者は、現在23人。ビルの外にも宿泊用の部屋を増やした。佐々木さんは「良い意味でも、悪い意味でも予想外の1年だった」と話す。

「立ち直りを支える主な活動は、1日3回ある90分のグループミーティングだ。全員が一つの部屋に集まって、それぞれが自分について語る。過去に何をあり、何を思い、今はどうか。うらみ、ねたみ、薬、寂しさ、悲しみ、怒り、喜び、性、恋愛……。毎日徹底的に、自分と向き合う。」

5月下旬のミーティング。覚せい剤や女性への乱暴、傷害、窃盗など、1人ずつ過去の過ちを打ち明けていった。ほかの参加者は黙って話を聞く。参加した男性(46)は「秘密をみんなの前で話すと、薬になる」と言う。

「心の痛みを消すために、薬物に手を伸ばしてしまっ」と佐々木さん。当事者同士だからこそ、心の奥底にある痛みを全部はき出すことができる。「そうやって薬物を欲しがると、薬への欲求が薄れていくのです」

初めての1年。「成果もあつたが、裏切られたことも少なくない」という。生活のために渡した金で酒を買ったり、腹を立てて包丁を向けてきたり。施設を飛び出し、自殺した人もいた。そんな彼らは、自分で薬をやめられると

口をそろえる。でも「強い意志を持って」と思い込んでいる人より、自分の弱さを自覚している人の方が立ち直るきっかけをつかみやすい」と佐々木さんは言う。



グループミーティングでは、佐々木さん(右)も、自身の体験を包み隠さず話す。甲府市伊勢4丁目

山梨ダルク1周年フォーラム「出会いの命のリレー」  
【日時】14日午前10時～午後4時半  
【会場】甲府市総合市民会館芸術ホール(甲府市青沼3丁目)  
【参加費】1000円  
【問い合わせ】山梨ダルク(055・223・7774)

#### 新聞記事より

- 六月七日(日)
- 六月十六日(火)
- ↓ 六月十三日(土)

#### 朝日新聞

#### 山梨日日新聞

#### 読売新聞

### 風林火山

「夜、眠るのが怖かった」と話すができない状態で、自殺ばかり考えるようになった。シンナーや大麻、覚せい剤に手を染め、依存症に苦しんだ人たちの体験談が生々しく会場に響いた。先日、甲府市内で開かれた薬物依存者の治療と社会復帰を支援する施設「山梨ダルク」(甲府市の1周年フォーラム)で、施設利用者が次々と登壇し、「薬」にむしばまれた生活がいかに悲惨であったかを訴えた。転落の入り口は「先輩に勧められて軽い気持ちから」「仕事が好き調な時に、ちよつとした心の緩みで」などと、興味本位が目立つ。次第に泥沼から抜けられず、仕事を失い、友人は離れ、深まる孤独感……。覚せい剤を断つてからも後遺症に襲われ、病院に通っている男性もいた。山梨ダルクで、同じ体験を持つ「仲間」と出会い、一筋の光を見つけた人は多い。「苦しんでいるのは自分だけではない」「本当の笑顔を見せられるようになった」▼もちろん、将来への不安がないわけではない。ミーティングやボランティア活動など、回復のためのプログラムを続けながら社会復帰への道を探る▼1年間の歩みの中には、多くのグループや団体の支えがあったことも確か。佐々木施設長は「過ちを犯した人が立ち直れるやさしい社会が理想」と話す。利用者全員が薬と決別し、笑顔ある生活を取り戻すためには、行政や地域が彼らを理解し、受け入れる環境づくりが必要だろう。

### 山梨ダルクが1周年

薬物依存者が互いに助けあふフォーラム

薬物依存者が互いに助けあふフォーラム(後援)を開く。山梨ダルクは資金3万円を合わせ、共同生活をする中で徐々に依存からの脱却を



1周年フォーラムに向けて、歌や踊りの練習をするメンバー(10日、甲府市中央のカトリック教会で)

14日午前10時～午後4時半、総合市民会館芸術ホール。参加費は1000円(資料代)。問い合わせは山梨ダルク(055・223・7774)まで。